
the weakest HERO

ラウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t h e w e a k e s t H E R O

【Nコード】

N 4 5 2 2 S

【作者名】

ラウス

【あらすじ】

アイドルやモデルが裸足で逃げ出すほどの美貌を持つ男の子、いや、男の娘、『文原マコト』が紡ぐ異世界召喚最弱モノです。

この作品は『最弱の主人公 最強の仲間たち』の改訂版です、もちろん、前作を読まなくても普通に読めるのでご安心して読んでください。

ハジマリ（前書き）

まず最初に言っておきたいことがあります。

どうしてこうなった。

ハジマリ

例えば。

例えばの話でしょう。

可愛い男の子がここにいるでしょう。

その男の子はそこらの女子どころか世間一般において超絶美少女と讃えられる超人気アイドルやモデルを超越するどころか、二次元の世界、つまり画面の中のありとあらゆるオタクどもから崇拜される数多の嫁すらも超越する、完全無敗な男の子。いや、男の娘。

そんな存在がもし実在したら、女装させない腐女子はいない、いや、居ない筈がない！

と、というのが僕の姉である『文原カナデ』^{ふみはら}の証言であり、そして僕こと『文原マコト』^{ふみはら}はその腐った姉の言うことにはさっき言った完全無敗な男の娘らしい。

確かに僕も鏡を見るたびに自分の容姿で男として絶望したくなるけど、そんな大げさな、と僕は思うのである。

しかし現実は無情で、この世に生を受けて十八年、一度たりとも初見で男だとばれたことが無い。

「で、今日はメイド服、と……毎度のことだが、校則違反じゃないか？」

「学園長？ ああ、あの物陰でカメラ片手にこっちを凝視してるおじいさんのことかい？」

そう言って僕はこの若草大学名物のミックスジュース改をストロ
ーで啜る。

ちなみにこのミックスジュース、発売当初から『改』の名を有し
てたらしい。

「……まあいいか、俺もマコトの可愛らしい姿を見ていられて嬉し
いし」

「幼馴染として忠告しておくよ、爛、日本じゃ同性同士の結婚は無
理だ」

「じゃあ海外行こうぜ」

「まず僕に同性愛の気持ちが無いことが問題だな」

僕の前の席でマンゴージュース the セカンドを大変不味そうに
飲んではるのは僕の幼馴染、『佐藤爛』^{さととうらん}、
究極至高の超絶イケメン、眉目秀麗成績優秀を地で行く金髪黒目
の超人。

五歳のころから一緒に居る、所謂腐れ縁ってやつだ。

「ていうかそんなに不味いなら捨てればいいのに」

「いや折角マコトがおごってくれてしかも間接キスだし……全部飲
みきってやるぜ」

いやまあ、確かに僕が買って一口飲んで不味かったから爛にあげ
たものだけ……。

まあいいか、捨てるのも忍びないという気持ちはあるし。

「あれ？ マコトじゃん、ついでに爛」

「ん？ 姉ちゃんだ」

噂をすればなんとやら、我が姉、文原カナデの登場だ。

赤茶色の綺麗な髪を肩口で切りそろえた髪型に、これまた美人なお顔、僕の周りの人物は何故こつちも美形だらけなのだろうか。

赤いフレームの眼鏡をクイツと左手で直した我が腐姉——愚姉ではない、ここ重要、テストに出る——はいつものように意地の悪い笑顔を浮かべると、こちらに近づいてきた。

うん、嫌な予感しかしねえ。

「ああ、爛、別に爛×マコトを育むのは一向に構わないけどそれは物語の話……現実でのマコトは私の嫁だってことを忘れないでよね？」

「カナデさん、それは間違いです。二次元でも三次元でも、マコトは俺の嫁です」

「……まずは僕が男で嫁じゃなくて婿ってところを修正させてもらおうか」

「え」

「え」

「いやなんで『何それ意外』みたいな表情してんだよ！」

ていうか、僕は、誰の嫁でも婿でもなあああああい！

「で、何の用だよ姉ちゃん」

「お姉さまと呼べ」

「今すぐ帰れ」

「もう、ツンデレなんだからあ……えっとね、ついにブルマを手に入れたから今日体育の時間着てね」

「着ねえよ！ て、おい！ 爛！ 想像して鼻血垂らすな！」

「カナデさん……g」

そんなこんなの、平和な日常。

きっと僕はこうやって波乱万丈に見せかけた極めて平和な日常を送って死ぬんだなと思ってた。

でもその考えは、突如襲った非日常により終わりを迎えることになった。

ハジマリ（後書き）

作者は変態ではありません、思春期という名の魔の言葉が生み出した作者の意思を無視した作品なのです。だから、作者は変態ではありません、仮に変態だったとしても、変態という名の紳士です。

ダイニワ

さあ、回想の時間だ。

僕こと『文原マコト』は腐姉と同性愛者の幼馴染に無理矢理着せられた一サイズ小さいブルマを着て体育の授業に出るという羞恥プレーに涙目ながら耐えた後、最早普段着と化したメイド服を着て、帰路に着いた。

その後、腐姉の持ってきたドレスやらナース服やらで着せ替え人形にされるさなか、少し楽しんでる自分に絶望した後少し遅い夕食を食べ始める。

夕食をもう少しで食べ終わるってところで我が腐姉が「そうだ、京都に行こう」と何の脈絡のなく言ったところまでは覚えてる。

しかしここは何処だ、三百六十度全部真っ白な世界、空間。

そして僕の目の前にいる、小さい爺さん。身長は三十cmくらいだろう。

えーと、

「状況の説明を求めます」

「異世界召喚最強モノ」

成程、納得だ。

「こういうのはパターンの考えて逃げられないんだろ？ ならや

つてやんよ俺やつてやんよ」

「ほっほっほ、それはそれは……流石ワシじゃな、最初っからこんな面白い娘を引き当てるとは」

「僕は男だよ、察するにアンタ神様なんだろ？ わかねえの？」

「神様なんてちよっと力の強くて寿命の長いだけの人間とほぼ変わらんよ、全知全能な存在なんているわけないじゃろう」

「まあそりゃそうか」

「ふむ、ではそなたにやつてもらいたいことは……で、え？」

「ん？」

「お、男じゃとおおおおおお！？」

「遅っ！」

「信じられん！ ワシは間違いなく『ロリ幼女』で検索したはずなのに！ 世界の意思にさえ女と認識されるほどの女顔じゃとでも言うのか！？」

「……言葉も出ねえ……」

ていうか神様、アンタロリコンなのか……。

大丈夫かこの世界……。

そんな感じで暫く悶えてた神様は、ふと何かを悟ったのかこっちを見据えた。

「男の娘もいいよね！」

「変態か！」

「と、まあ冗談はこれくらいにしとくかな」

「半分くらい本気だったろ」

「失礼な、十割じゃ」

ふざけんなおい。

「いい加減話を進めようか、まず、お主を呼んだ理由^{わけ}じゃ」
「やっとか……」

「ま、端的に言つと世界を救ってもらいたいだけじゃ」

爺さんの話を要訳するところだ。

今、爺さんの管轄する世界で幾つかの世界が壊滅の危機に瀕して
るらしい。

で、チートな能力あげるからそれ救つてきてとのこと。

いや、うん、清々しいほどテンプレだった。

「……行つてくれるかの？」

爺さんのその問いに、僕は答える。

「——だが断る」

～ f i n ～

「……言ってみたかっただけじゃよな？」
「うん」

はあ、と溜め息を吐いた神様は、僕を見つめ、こう言った。

「で、何の能力がいい？ 三つまでなら何でもおkじゃ」
「うーん、そうだなあ……ちょっと考える時間頂戴」

いいじやろう。という神様の言葉と同時に、僕は思考を始める。

テンプレ的に考えて、戦闘はあるだろう。

しかしそこは僕という人間、戦闘に関しては他の追隨を許さないほど僕は虚弱で、貧弱で、絶望的なまでに弱いのだ。

アルティメットリアントアップオンアワーズ

【究極の他力本願】、それが爛の付けた僕の二つ名。

その名に違わず、僕は人を使うのは得意で、好きだ。

好きなゲームは育成ゲーム、嫌いなゲームはアクションゲーム。

ならば……と、僕は決める。

「決めた、僕は決心したよ、爺さん」
「ほう、言ってみろ」

「一つ目、創造魔法、またはそれに近いもの」
「ふむ、創造魔法は……ちょっと無理かの、それに近いと言ったら

……複製^{コピー}じゃな」

「ん、それでいいよ」

じゃ、次だ。

「二つ目、回復魔法や補助魔法を最大限まで使えるようにして」
「まあおkじゃ、それくらいならの」

よし、んで最期。

「僕自身の固有結界を使用可能にしてくれ」

「お主自信？ あの有名なアンリミテッドブレードワークスとかじやなくてお主の内面世界ってことかの？」

「うん」

「むう、どんなのになるかわからんぞ？ それでもいいならいいが

……」

「構わない」

「……了解じゃ」

そして爺さんがどこからか取りだした杖を振ると、僕の身体がポワツと淡く光った。

「完了じゃ、ああ、あとついでに固有結界を一時間維持できる程度の魔力も与えておいた、ついでに魔力の自動回復機能もな。では、質問とかが無ければもう二つ目の世界に送るぞ」

「ん、お願い」

こっして。

こうして僕の平和で平和で平和すぎる変わった日常は終わりを告

げ、変わりすぎな非日常が幕を開けるのであった。

そういえば、姉と幼馴染は、どうしてるだろうか。

そんなことを、薄れゆく意識の中でふと思ったのだった。

ダイサンワァ！（前書き）

書き溜め終了

ダイサンワァ！

思い返せば。

思い返せば僕って相当数奇な運命辿ってるんだなあ、なんて思った。

二次元に生きる、人を『萌え』させるためだけに造られたキャラクターたちすら超越する可愛い女の子、じゃなくて男の子。いやいや男の娘。

生まれてこのかた初見で男と見破られたことのない、異形の生物。そして今回のトリップだ。もう笑うしかねえ……。

現在地、どうか森の奥。

神様、あなたは僕に迷子になった末餓死しろと言うのですか？

僕の運動神経はゼロだ。比喻ではなく、完全完璧、某眼鏡の駄目小学生ですらびっくりな運動能力を僕は持つ。ついでに筋力もない。三歩走れば転び、腕相撲で小学一年生に負け、十分以上歩き続けると呼吸困難に陥るという徹底ぶりだ。

そんな僕を森の奥に放り込むなんて……爺さん、あんた頭おかしいのか。

（ま、しゃあないか。文句は生き残ってからたっぷり言おう。とりあえず今は——）

——生きてこの森から出ることを、考えよう。

地獄で仏とはよく言ったものである。

能力と一緒に付いてきた魔力が作用してるのかしらんが、何だか僕の身体能力があがってるのだ。

具体的に言うと、五歩走っても転ばなかった。

これ以上は怖くて試して無いが、兎に角これでなんとか希望が持てたのである。

しかし、今気付いたが僕ってメイド服着てるんだよね。黒色の生地に、真っ白なりボンがトレードマークのミニスカメイド服。森の中歩く格好じゃないね、うん。慣れすぎて忘れてたよ。

そう思い、僕は能力の一つを発動させる。

《複製》^{コピー}。

この能力^{スキル}で出来ることは主に二つ、『自己の記憶からの複製』と『解析による複製』。

詳しくは省くが、とりあえず僕の記憶に残ってるものなら有機物

無機物問わずなんでも複製できるのだ。

まあとはいったものの生物は数分しか維持出来ないし、服とか武器とかだと多少質が落ちるのだ。

ま、説明はこんなもんか。

僕はなるべく動きやすい服をイメージする。

イメージ……イメージ……。

あれ？ おかしいな、何故かナース服やメイド服とかのあきらかにコスプレ目的の動きにくい服しか思い浮かばないぞ？

ていうかここ数年……というか生まれてこのかた男物の服を着たこと無い気が……。

「……な、泣いてなんて無いもん！ ただ、ただ目にゴミが入っただけだもん！」

誰もいないけどこの頬から伝わる液体について言い訳する。
うん、虚しくなってきた。

しかたなく、爛が着てたうちの大学のブレザーをイメージする。

「……複製、コピースタート
開始」

ついでにチェック模様の長ズボンもイメージする。

すると、オレンジと紫の光が瞬き、いくつもの魔法陣が重なり、それはもう幻想的な光景が広がった後、僕の手には緑色のブレザー

と、チェック柄の……スカートが……。

「……………おいちよつと待て」

何だこれ？ 何だこれ？ 新手のいじめ？

僕が女装するのは、もはや宿命とでもいいたいのか？

つか、これ絶対あの爺さんの所為だろ、それ以外考えられねえ……。

まあ愚痴つてもしょうがない、メイド服よりはマシだから着替えるとするか。

「うんしょと、うーん、やっぱ爛のをイメージした所為かぶかぶかなあ……………」

無いよりましか。そう考え、脱いだメイド服を固有結界内に入れる。

ススス……と溶けるようにメイド服は僕の固有結界^{なか}へ入って行った。

それを確認して、また歩き出す。

え？ 固有結界の詳細？ ……まだ秘密ってことで。

「——お」

そんなこんなで、見えてきた。

「――街だ」

やっと、森を抜け出せた。

眼前に広がった城壁に、僕は思わず息をのむのであった。

ダイ……ヨン、ワ

さて、一度この世界について説明をしておこう。

剣と魔法の国というごくありきたりな世界観を持つこの世界の名前は、『アシアスラ』、なんだかモンハンに出てきそうな名前だ。

まあ説明するまでもなく、所謂オーソドックスな王道ファンタジーな世界で、ヨーロッパのような街並みと、エルフや獣人、ドワーフなどの亜人が普通に住みつくどこかで聞いたことあるような世界観だ。

ん？　なんでそんな知識があるかつて？

この世界に來た時に頭ん中に知識として流れ込んで來たんだよ、多分、あの爺さんの計らいだな。

ああ、一番重要なことを言うの忘れていた。

世界を救うために派遣された僕だが、別にこの世界は滅亡の危機なんかに陥っていない。

なら何で僕がここに派遣されたかというと、所謂チュートリアルみたいなものらしい。

まあ戦うスキルを持たない僕が単身でいきなり滅亡の危機に陥ってる世界に放り出されても困るからな。

……仲間、出来ればいいな。

や、作らないと拙いよな。

そんなことを考えながらやっと辿り着いた街に、僕は興奮しながらも入る。

やー、疲れた。色々やることはあるけど、とりあえず宿屋だな、宿屋。

もうね、体力が限界なの、足ガツクガクなの、早いとこ宿搜して休まなきゃ死んじゃう。

おっと、その前に……よし、見た。

何を見たかって？ 通貨だよ、通貨。

『複製^{コピー}』で一回でも見ればいくらでも複製できるからな、とりあえず露天のおっちゃんが持つてる銀貨を見させて貰った。

これで僕は晴れてお金持ちということだ、ぐへへ……。おっと、はしたない発言をしてしまった。自重自重。

さてと、宿屋は……あった。

見つけたのは少し大きめの宿屋だった。

『宿屋：オーバーザトップキル』とこの世界の字で銘打たれた看板を見て、軽く——いや、ドン引きしたが、宿屋は宿屋、すぐにも休みたいし、もう僕の体力ゲージは限界である、レッドゾーンである。

ああ、ちなみに描写が省かれてたけど神様はちゃんと僕に翻訳機能を付けてくれたから言語には全く困らないよ。後付け設定なんか

じゃないよ、忘れてたとかでもないんだよ、うん。

ほ、本当なんだからねっ！

「いらっしゃーい」

宿屋に入ると、野太いおっさんの声が僕を出迎えた。

ロビーなのだろう、数人の人がたむろっている。

そして受付らしき場所にさっきの声の発信源であろうおっさんが煙草を吸いながらなにやら本を読んでいた。

「？ どうしたんだいお嬢ちゃん」

最早当然のように女の子扱いを受けるが、もういつものことなので特に気にせず、僕は言う。

「部屋、貸して、くださ、い……」

息切れで途切れ途切れのセリフになってしまったが、受付のおっさんは部屋の鍵らしきものを取り出し、「銀貨一枚」とだけ言った。

僕は懷に手を入れ、銀貨を複製^{コピー}、取り出す。

それを渡すと、おっさんは「部屋は四階の奥だ、気を付けな」とだけ言ってまた本を見だした。

四階かー、まあそれはいいんだけど昼間からお酒飲んだのか？
少し顔が赤いぞ？

まあ僕には関係ないか。

「ん、ありがとうございます」

礼を言い、まだ少しおぼつかない足取りで階段に向かう。

しかし、なんか視線を感じるな。やっぱりブレザーは目立つか、早めにこの世界の服も買わなきゃなー。

あ、ちなみにこの世界の服装はやはりというか中世ヨーロッパみたいな感じで、ブレザーは流石に無い。

「あ、あの……」

「はい？」

突然声をかけられた。

誰だ？　と思って振り返ると、そこには好青年っぽい青毛の男の子がいた。

「なんででしょう？」

何かやっちゃったか？　いや、でも注意しようとしている表情じゃないな。

もしかしてナンパか？　おいおい冗談じゃねーぞ。

「その……服、似合いますね。見ない服ですが……一体どういっ

……」

「服？」

ああ、なんだ、多分彼はファッションデザイナー志望なのだろう。会っていきなり服のことを訊くとは……よほど勉強熱心なのだろう、でもまあ正直に答えるわけにはいかないし少し嘘を交えて説明しよう。

「えっと、これはブレザーって言ってね、僕の部族に伝わる伝統工芸で出来てるんですよ」

「へ、へえ、そうなんだ。く、詳しく訊きたいからちよつとそこでお茶しませんか？」

うお、本当勉強熱心だなあ、家の腐姉も見習ってほしいや。

でも、

「ごめんなさい、長旅してきたところだから疲れてるんです。また今度でいいですか？」

そう言つと、青年はあからさまにシユンとし、去って行つた。

うーん、本当にごめんね、そんな頬が紅潮するほど興奮してたのにブレザーのこと詳しく教えられなくて。

今度会つたら改めて教えてあげよう、うん。

そんなこんなでタイムロスがあつたが、僕は階段を上がる。

一段、二段、三段とあがつたところで、僕は立ち止まる。

「ぜえー、ぜえー……」

体力切れだ。くそ！ 爛が居てくれたらおんぶしてもらったのに！

膝に手を付き、呼吸を整える。

震える足を全力で動かし、四段目に足を踏み入れる。

「っはぁー……ぜえ……」

こ、こんな調子で四階まで登るとか……無理ゲだろ……。

「だ、大丈夫ですか？」

お、さっきのファッションデザイナー希望の好青年じゃないか、
うん、大丈夫じゃないよ。

「お……」

「お？」

「おん、ぶ……してくれませんか？」

青年は数秒フリーズした後、顔を紅潮させながらも頷いてくれた。

助かった。これで四階に辿り着ける。

見知らぬ人におんぶしてもらうのは思いのほか恥ずかしかったが、
サイズが小さいブルマを履かされるよりは良かった。

いやー、あれはやばかった、羞恥心で死ねると思ったもん。

まあ何はともあれ部屋に辿り着いた。
青年にお礼を言い、別れ、部屋に入る。

おお、なかなか良い部屋じゃないか。

木目調の壁と床、ベッドも大人二人くらいなら寝れそうなほど広く、置いてある椅子や机もなかなか上等なものだ。

「結構高級な宿屋だったのかなあ」

だとしたら銀貨の価値は結構高いのかもしれない、まだ通貨の価値とが分からないから何とも言えないけど。

「あー、シャワー浴びたい」

ベッドに寝転がりながら呟く、そういえば風呂と違ってあるのかなあ……無かったらどうしよう……。

でも今はもう眠……。い……。

ダイゴワアアアア（前書き）

テスト週間なのに小説なんて書くな？

違うね、テスト週間で学校が早く終わるからこそ、小説を書くのさ
（キリッ）

ダイゴワアアアア

さて、僕の能力の一つ、回復魔法や補助魔法についての説明でもしようか。

まずこれは僕の貰ったチートな能力の中でも一際強力であると僕は思っている。

制約として僕自身には掛けることはできないとはいえ、ホイミ並みの魔力消費量でベホマズンが放てるというチート。

さらにザオリクやらレイズデッドやらリカームの蘇生魔法すら普通に使える。

ようするに仲間が死んでも蘇生可能。まあ跡形もなく消えたら無理かもしれないけど。

そして補助魔法、これはさらに酷い。

回復魔法と同じく自分に使うことはできないが、その効果は絶大、実験としてちようどネコっぽい生き物に襲われてたネズミに攻撃力^{ハイキ}強化と速度強化を^{ルト}掛けたら次の瞬間には腹に大穴を開けたネコの死体が倒れていたほどだ。

しかもこの能力、なんとオリジナルまで作れるのだ。

試しに全能力強化とか作ってみたが、まだ使ったことは無い。

なんかごっそりと魔力持ってかれそうで怖いのだ。

僕は弱いから、何が起きてもいいように魔力はなるべく温存してるのだ。

まあそんなこんなで、現在地、スラム街。

この世界に来て三日経ち、最初に来た街——ベベベベベベベベベベ——をあらかた探索し終わったとき……。

て、もう何回も思ってたけどベベベベベベベベベベベベってなんだよ、うん、いやまあ僕は異世界人だから感性とかがこの世界の住民とは違うってのは理解してるんだけどさ、理解はできても納得はできないって言うのか、こういうの。

閑話休題。

つまりまだ行っていないとこがこのスラム街だけになったのだ。

スラム街といえば、パワポケ4裏のスラム街が浮かぶ僕だけど、ここはそれ以上に酷かった。

異臭。腐敗、そして瘦せ細った人。

……なんかこう、イラツとくるな。

街の奴らとこの人達の貧富の差が、むかつく。

ふと道端で寝てる老人が目に着いた。

「……………」

まだ生きているようだ。

「ん……………」

理解はしている。ここで僕が能力を使って一時しのぎで助けても、根本的な解決にはならないことを。

まあ、納得はしてないんだけど。

「大丈夫ですか？」

思わず、声を掛けていた。

老人は、「うう……」と呻く。

そして僅かに目を開けると、静かに笑い、言った。

「ふ……ふふ……この街で……誰かに看取られて……死ねる……とは……の……——」

ガクンと、糸が切れたように老人は死んだ。

蘇生しても、無意味だろう。

蘇生出来ることには出来るが、その次の瞬間にはまた死んでしま
うだろうから。

「……アーメン」

別にクリスタンじゃないけど、アーメン以外に死者を送る言葉を
知らないからとりあえず言うておく。

……少し、心が重いな。

立ち上がり、また歩き出す。

崩れかけの小屋の間を抜け、舗装なんて欠片もされていない道を進
むと、少し広いところに出た。

さっきの老人とは明らかに違う、若い——とは言いがたい人もあるが、どう見ても働き盛りの年齢の人たちが、くたびれた鎧を着て数十人、座りこんでたのである。

全員が全員——無気力な瞳をし、この世の終わりのような顔をしていた。

「一体何が——」

「旅の人？」

突然横から声を掛けられ、声の主の方を向く。

子供がいた。7、8歳くらいの子供。

汚れてくすんだ茶色の髪をした遊び盛りであろう男の子。

騎士見習いか何かだろうが、周りの大人たちの鎧より一回り小さい軽鎧を着ている。

そんな子供すら、無気力で無意味な眼をしていた。

「すぐどっか行ったほうがいいよ」

子供は感情のこもって無い抑揚のない声で言う。

まるでRPGのNPCみたいに。

「ここで——何があったの？」

「伝染病さ、俺らの隊が全員掛っちゃってね、ここまで追いやられちゃったのさ」

「伝染病」

……穏やかじゃない言葉だな。

要は、隔離か。

これ以上伝染病が広がらないための。

「ああ、もう……」

いらつく、むかつく、腹が立つ。

いくら伝染病だからってさー、もうちょっとまともな場所に隔離してやれよ。

「その伝染病の薬は？」

「開発された、でも、お金が無いから買えない。俺らの隊は成り上がりの貧乏人で構成されてたからね」

カチン。

今の一言で、もうキレた。

「僕はなあ……善人でも聖人君子でも無いけど……」

——偽善者なんだよ!」

自己満足のために良いことをして、褒められるために善行をする。

偽善者。

「アナライズ!」

子供の容体を見る。

ふむふむ、神経を食い荒らして徐々に殺していく病か、症状は段々と手足が動かなくなり、最期脳が死んで死ぬ、性質^{たち}わりい。

「ベホマ！ 浄化！ ディスペル！」

ベホマは体力回復、浄化は汚れを落とし、ディスペルは状態変化を回復。

アナライズを通して見る限り、これで完全に回復したようだ。

うん、満足満足。

子供を見ると、驚いたような目でこちらを見ている。

そして開口一番。

「か……金ならねーぞ」

と言った。

「あ……あんた魔法使いだったのか？ 何が目的だ？」

「金なんていらん、魔法使いか、一応そうなる。目的は自己満足」

律義に答えてあげた。

それでも子供は納得しないのか——理解も出来て無いのだろうか、茫然とした目でこちらを窺っている。

僕は手を差し出し、立ち上がることを促す。

子供は警戒と疑問と安堵を混ぜたような表情で僕の手をとり、立

ち上がった。

「さてと……」

周りを見渡すとこの広場にいた全員が僕のことを見ていた。

その眼には、何か信じられないようなものでも見たかのような感情を映している。

「彼らも治さなきゃね」

全員に動揺が走った。

「お、おいアンタ、正気か？」

「正気さ、僕は自分の気持ちに正直だからね」

何使えばいいかなー、こんだけいるから一人ひとり直してくのはめんどくさいし……。

「例え利益にならなくても僕は彼らを——キミを救いたいと思ってしまった。だからそれに従うまでさ」

使う魔法が決定したので魔力を込める。

「範囲設定、OK、ベホマズン、大浄化、オリジナル——ディスプレイアン」

まず回復効果が及ぶ範囲を設定、そして範囲内の生物全ての傷を完ぺきにいやす魔法、ベホマズン。

汚れを落とす、大浄化。そして今考えたオリジナル、ディスプレイ

の複数効果版のデイスペリアンを使った。

キラキラッと光が走り、傷をいやす。

ジュワアアという音を奏でながら、汚れを落とす。

そして最後に伝染病にかかった全員の身体から、紫の光が飛び出て、空に消えていった。

「……う」

次々と座つてた人達が立ち上がっていく。

そしてその中の一人が、その眼に涙を浮かべながら叫んだ。

「う、うおおおおおおお！ 治った、治ったあああああ！」

それを口火に鎧の騎士たちが、騒ぎ出した。

皆、涙を流し、仲間たちと抱き合い、死を免れたのを喜んでは。

「あ……アンタ、何者だよ……こんな凄い魔法……見たことも聞いたことも……」

子供が目を見開いて言う。

しかしその続きは一つの渋い声で遮られた。

「失礼」

白髪が混じったオールバックの髪、蓄えられたヒゲ、そして、鎧に他の人には無い盾と剣の紋様が入っていた。

……騎士隊長とか、そんなのだろうか。

「た、隊長！」

ビシッと、子供が敬礼する。

やっぱり隊長だったか。

隊長は子供を一瞥すると、こちらを見た。

「まずはお礼を言わせてもらいます。部下を……我らを助けていただき、誠に感謝しております」

「いえ、お礼なんて……」

年上には敬語、日本人の基本である。

「いえ、死地から救ってくれた貴女にはいくら感謝しても感謝したりませぬ、何か礼をしなければ……我らの気持ちが収まりません」

そう言つて隊長さんは膝を着き、手を胸にあてた。

この世界での服従の格好だろうか。

年上に頭を下げられるのに……違和感を感じる。

「……ん？」

ふと眼の片隅に、まだ座ってる人が見えた。

回復の範囲内には入ってたはずだから……まさか……。

「……彼は？」

「ん？……ああ、彼は……つい先日……」

間に合わなかったのか……。

「……っ」

罪悪感が浮かんでくる。

僕があと一日早くここに来ていれば……。

そんなこと言ってもしょうがないけど、気分は晴れない。

「……レイズソウル」

光の渦が僕から放たれ、死体に落ちた。

「アードベホマ、浄化、ディスペル」

それぞれの呪文のエフェクトが死体に降り注いでいく。

すると……。

「……う」

はい蘇生。

すっげー滅茶苦茶だなこの能力。

「死者が……生き返った——！」

隊長さんが口をあぐり開けて驚いてる。

そりゃそうだろーなー、僕も逆の立場だったら絶対驚くし。

はー、まあこれでやっとスッキリした。

魔力の消費は……まあ気にするほどのもんじゃないな。

「貴女は――」

隊長さんがこっちを向いて、言う。

「女神様なのですか？」

わお、女神と来たか。

女神、ねえ。まず僕は男だから女神じゃないことは確かだな。

まあでもある意味、

「いえ、半神ですよ」

一応創造神の眷族扱いらしいし、こんな偽善を行った理由付けとしては妥当だろ。

「半……神……？」

「半分人間の、半分神様です。神の眷族みたいな存在ですよ」

それを聞いた途端、隊長さんが低かった頭をさらに下げて平伏した。

それに釣られるように他の騎士たちも頭を下げていく。

「ちょー！ タンマ！ 頭なんて下げなくていいですって」

「そ、そういうわけには行きませぬ。神の使いを前にそんなこと……！」

随分簡単に半神なんて信じるなあ……まあ目の前で使者蘇生なんて見せられたらそうなるか。

「あー、じゃあ、お願いがあるんだけど、いい？」

「なんなりと」

「まず僕のこととは他言無用でお願い」

神の使いが訪れたなんて広められたらたまらん。
隊長さんは神妙に頷いた。

「そこで、この子頂戴」

そう言って、僕は僕の右後ろで平伏してた子供を指差した。

騎士たちに動揺が走る。子供は突然指差されてテンパってるようだ。

「ちょ……頂戴というのは？」

「その言葉の通りです、今仲間集めの最中なんですよ」

「そ、それでしたら他の、もっと強い者のほうが……」

「子供の方が都合が良いんですよ」

「ごついおっさんと旅なんてしたくねーし、ていうか僕の見ただと相手が大人だと夜あぶねーんだよ。」

その点子供なら可愛いし、将来性あるし、襲われる心配ねーし。

「あ、でもこの子がOKを出したらですけどね」

そう言って僕は子供のほうを向く。

「どう？　僕と来ない？」

優しい声色で言う。

「はい……えと……」

子供は隊長らをちら見した後、僕の目を見て言った。

「よろしく、お願いします」

……。

「そか、よろしく。それじゃあまずは自己紹介しよう、僕はマコト、マコト・フミハラ。キミは？」

「えと、アレックス……です」

これが、僕とアレックスの、最初の出会いだった。

ダイゴワアアアア（後書き）

最初の仲間、アレックス登場

d a i r o k u w a (前書き)

テスト終わったー

そして久しぶりの更新

d a i r o k u w a

僕は。

僕は手の中にすっぽり収まるサイズのガラス玉を弄くりながら、街中を歩いていた。

隣には先ほど仲間になった少年、アレックス。

自分の身長ほどある剣を抱えながら健気に付いてきている。

ちなみに僕とアレックスの身長は同じくらいだよ、その所為で端から見ると姉弟だね、ハハッ！

笑えねえよ。

僕大学生だぞ？ もうすぐ成人だぞ？ どうして小学生くらいの子供と身長が変わんねえんだよ、ええ？

そんな僕の内心の葛藤はいざ知らず、アレックスはしっかりと僕の隣を歩いている。

僕はガラス玉を自分の固有結界の中に放り込み、足を止めた。

「？ どうしたんですか？」

アレックスも足を止め、心配そうにこちらを窺ってくる。

いやさ、凄く言いにくいことなんだけどさ。

「お、……おぶってくれる？」

体力の限界である。

「どんだけ体力無いんですか……」

宿屋に付き、ベッドに降ろしてもらった矢先にアレックスがそんなことを言ってきた。

僕はそれに良い笑顔で「こんだけ！」と指で半径2cmくらいの円を作って言った。
凄く呆れ顔された。

「言葉通りの意味、マジでこんだけしか体力無いのが僕の凄いとこ
ろだね」

「全然凄くないです」

ばっさりと言われた。

少しショックだ。

まあ慣れてるけど。

「まあいいや、閑話休題閑話休題。本題に入ろう」

僕はベッドの縁に座りなおし、アレックスは椅子に礼儀正しく座った。

ちょうど向かい合う形だ。

「そうだね、まずはちゃんと自己紹介しよう、僕はマコト、マコト・フミハラ

見ての通り——」

男だ。

と、言おうと思ったが、あえてやめておいた。

なんか面白そうだし。

「えっと、見ての通り、超絶美少女です」

「……まあ否定できませんが……」

超絶美少女が認められてしまった。
まあいいけど。

「じゃあ俺——いや私は——」

「俺でいいよ」

「あ、はい、ありがとうございます」

この世界では目上の人には一人称を私にするらしい。

まあ僕は別に目上じゃないし、使い慣れてるほうを使ったほうがアレックスも楽だろう。

「……つと、俺の名前はアレックス……です。姓名は無し、騎士見習いです」

「敬語もいらなんだけどね」

「えつと、それは流石に……」

見習いと言えど騎士だから、仕える人に敬語無しは拙いらしい。

ふーん。

「ならばいつかその敬語を無くして見せるぜ！」

「何ですかその決意……」

今更だがアレックスはつつこみキャラっぽいな、僕の周りには今までいなかった新しいタイプだ。

……僕の周りの人物、

姉、変態

幼馴染、変態

……変態しかいねえ。

「ど、どうして泣いてるんですか？」

「違う！ これは塩酸なんだ！ 決して涙なんかじゃ無いんだー！」

「塩酸！？ 何ですかそれ！？ 素直に泣いて言いましょうよ！」

あ、アレックス……君ってやつは……！

「常識人だー！ 死んだ母さん以来の常識人だー！」

「うえ……！？」

抱きついた。

あまりの常識人ぶりに感動して抱きついてしまった。

結構勢いよく跳びついたため椅子ごと倒れるかと思ったが、アレックスは子供ながらも流石騎士、耐えてくれた。

ぎゅ、と手を後ろに回し、胸に頭を押し付ける。

あ、やべえ、結構落ち着く。

あれだな、新生児は母親の心臓の音聞くと落ち着くって言うけどそれに近いものかなこれは。

……いや、違うか。

「あ、あの……マコトさん……そろそろ……」

「ん？ ああ、はいはい」

素直に離れる。

アレックスは顔を赤らめながら服を整える。

……、僕は見逃さなかった。

アレックスのズボンがわずかに盛り上がったことに……。

まあ男の子だから仕方ないか、うん。

「それじゃ、僕の目的について話しとこうか」

「あ、はい」

僕は再びベッドに腰掛ける。

「まずはそうだな……異世界って分かる？」

「イセカイ……？ すいません、分かりません」

分かんないか……。

「うーん、つまり、こことは別の世界ってこと」

「こ、この世界以外にも世界ってあるんですか？」
「あるよ」

それはもう、無限に近いくらいに。

「僕はその無限に近い世界の一つに住む凡庸な一般人だったんだけどね、何の因果か、神様に目を付けられて幾つかの世界を救えとか言われちゃったんだよ」

「え、えっと……？」

「要するに……滅亡しかけてる世界が幾つかあるからそれをちよつと救ってきって神様に頼まれたんだよ」

かなり省略したが、アレックスは理解出来て無いようだ。
いや、まあいきなり神様とか言っても混乱するだけか？

「えっと……」

「信じられないかもしれないけど、これは事実だよ」

「いえ、そうじゃないです。信じてます……が、そんな世界とか神様とかが関わってる問題に俺なんかお役に立てるのでしょうか」
「立てるよ」

僕は即答した。

即答の名人とはこの僕のことだ。

自称だけど。

「僕は戦えないんだよ、世界最弱と呼んでも遜色が無いくらい。だから戦ってくれる仲間が必要不可欠なんだよ」

「……だけどそれは僕じゃなくても……」

「うんそうだね、けど君みたいな子供のほうが僕は都合が良いし、もう探すのめんどくさいから仲間になってくれるとすごい嬉しい」
「で、でも俺そんなに強く無いですよ？」

「問題ない、僕が強くしてやろう」

この世界の強くなる方法というのは、色々あるが、僕が一番効率良いと思ったのは『魔物を倒す』というものだ。

何でも、魔物を倒すと経験値っぽいものが手に入り、能力値がアップするらしい。

僕の補助魔法はかけると窮鼠がネコどころか虎まで倒せるようになるほど強力だから、なんとかなるだろう。

「うーん……」

「ま、よく考えて、僕に付いてくるってことは、暫くの間元の世界——この世界には帰れなくなるってことだから」
「……………」

アレックスは目を伏せてしまった。

考え込んでるのだろう、当然だ。

「それに命の保証も出来ない、後悔するかもしれない、だから——」
「お供します」

今即答しなくてもいいよ。

と、言おうとしたのに遮られてしまった。

でも、その返事は僕にとって凄くありがたい返答だった。

「あ、でも、一つお願いしていいですか？」

「……？ なんだい？」

「俺の——俺のお母さんを、助けてください」

——ふうん。

第七話（キリッ）（前書き）

遅くなりました

第七話（キリッ

「マコトって可愛い顔して、常識人で、それでいて狂ってるよね」

それは。

それはかつて僕がまだ中学生くらいのころに誰かに言われたセリフ。

「人の皮を被ってるっていうのかな？ いや、違うか、自分を騙してるのかな？」

女だかも、男だかも、何もかも、存在すらも不明な嘘吐きに言われた言葉

「私に言わせりゃ、キミは最弱なんかじゃなく、ただの超然者だよ」

違う。

僕はそんな大層なものじゃない。

僕は偽善者だ、弱者だ、決して、超然などという言葉が似合わない男だ。

否定しても、否定を否定してくるソイツがムカついて、僕はソイツを殺した。

けど、僕もソイツに壊されたから、お互い様だよな？

……ね？

………うあー。

「——うあー」

声に出してみた。
でっという。

「変な夢みた気がする……」

覚えてないけど。

覚えてないだけ気持ち悪い。

「……あれ？」

ふと隣を見るとアレックスがいない。

ううむ、僕の記憶では昨日ベッドが一つしかないという理由で一緒に寝たはずなんだが……。

無駄にでかいベッドから起き上がり、周囲を見渡す。

……………。

「…………アレックス、何で床で寝てるの？」

「…………難易度が高すぎる所為です」

首を傾げておく。

わかるけど。

当分遊ばせてもらおう。

「じゃ、着替えるかな」

「お手洗い行つてきます」

ちっ、逃げたか。

僕は寝巻にしたスクール水着を脱ぎだし、固有結界を頭の中で展開する。

さてと、今日は何を着ようかな…………。

うーん。

悩んだ末に巫女服を着ることにした。

赤と白のスタンダードな色だが、腋が開いている。

確か某弾幕ゲームのキャラの服だったけか、昔無理矢理着せられた覚えがある。

男としては大分長い髪を赤いリボンで括る。
ふさあつと髪が靡き、僕の頬をくすぐる。

今日も良い朝だ。

「あー、着替え終わりましたかー？」

「ん？ あ、ああ」

終わったよー、と言うと、アレックスが入ってきた。

「……なんか神聖な格好ですね……腋見えてるけど」

「神様に仕える人の服だからね、腋見えてるけど」

しっかしなんで腋開けてんのかねえ、わけわかめ。

「それで、あの……」

「わかってる、お母さんの病気を治してほしいんだっけ」

アレックスの仲間加入条件ってやつだ。

クエスト、アレックスの母親の病気を治せ。

報酬はアレックスが仲間になる、ってね。

と、言うわけで。

「到着です」

「意外と早く着いたね」

まあキンクリったからな。

目の前にはこの世界にとっては一般的にはサイズの木製の小屋。
ここがアレックスの母親がいる家なのだろう。

「この小屋が？」

一応確認。

「ええ」

正解だった。

「じゃあ早速入ろうか」

アレックスは頷くと、ドアをノックし、中に居る人——おそらく
母親と一言二言話すと、ドアを開けた。

アレックスが入ってくで、僕も遅れないように入る。

小屋の中は、簡素なモノだった。

椅子が数脚脇に置いてあって、豆電球に似た照明装置が天井から
吊るされている。

そして、ベッドが一つ。

その上に一人の女性がいた。

「あら……」

アレックスと同じ茶色の髪を肩口まで伸ばしたその人は、眠たげ

な瞳をこちらに向けた。

見た目は年齢は二十代後半くらいだろうか、焦心した表情をしてるため、少し実年齢より老けて見えるのだろうか。

いずれにしろ、この人……。

「まー！ 何？ 何この子？ かーわーいーいー！ あーくんの彼女？ 恋人？ え、ちょ、かーあーいーいー！ 持ちかえっていい？ 駄目？ 息子の彼女を寝取るというのも悪くないわね……じゅるり」

本当に病人なのか？

「ちょ、母さん！ 彼女とかじゃないから！」

「えー、違うの？ なんだ残念、よし、じゃあ……えーと」

「あ、マコトって言います。こんにちh……」

「マコトちゃん！ 私と一緒に百合の花を咲かせましょう！」

「いい加減にしろ！」

「もがもが……」

母親の口を塞ぐアレックス。

いや、テンション高すぎだろ……。

「もがもが……ぷはっ、なーんだ、片思いか、頑張れよ！ 我が息子よ！」

「ち、ちげーし！ 勝手に言うな！」

……？ 頑張れよ、からしか聞こえなかったが……何か言ったの

か？

「アレックス……そろそろ話しを進めたいんだけど」

「え？ ああ、そうだな」

「何？ 何？ 何の話？」

「貴女を治すという話ですよ」

瞬間。

アレックスの母親の表情が変わった。

おちゃらけてた顔が、真摯な顔に。

「……治す？ 私の……この脚を？」

「ええ、完膚無きまでに治してあげましょう」

てか、悪いとこ脚だったんだ。

まだアナライズしてなかったからわかんなかった。

「……不可能よ」

……。

「この脚はね、あ「ケアル」……え？」

よし、これで病原体は全滅した。

あとは……。

「ベホマベホマ、はい、これで完治」

ぱしーん、と軽く彼女の脚を叩く。

……手が痛い。

「もう痛くないでしょ？」

にっこりと笑う。

僕の回復魔法はもうチートの領域なんだよ。
治せない怪我は無い、多分。

「……お金は無——」

「いりませんよ、そんなもの」

だっていくらでも作れるし。

「じゃあ、何が望みなのか？」

「僕の望みは、ただ一つです」

「——息子さんを、僕にください」

第七話（キリッ）（後書き）

マコトの言動は全てわざとです
あくどいですねえ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4522s/>

the weakest HERO

2011年8月9日21時36分発行